

『西鶴五百韻』の用字

— 漢語の和語化と当て字 —

はじめに

これまでに、近世初期俳諧集一〇種を取り上げ、表記に関する研究を重ねてきた。^① その中には『江戸八百韻』で「哆」に「アツカヒ」、「婀娜」に「ヤサシ」と振り仮名が付される例、『當流籠拔』では「悶る」を「イキ(る)」と読む例など中国の本義から外れた特殊な漢字の用法が認められた。^② このような用法は『西鶴五百韻』にも見え、次のように「日外」を「いつぞや」と読む句が見える。

のへをまくらに戀はもみくしや (一一〇 西友)
よめもせぬ御文殊に日外は (一一一 西六)

右の句では、「日外」に振り仮名が付されないで、音読みであるか、訓読みであるかには問題が残るが、「いつぞや」の意味を表す。

『西鶴五百韻』の用字

田中 巳榮子

杉本つとむ氏の『西鶴語彙管見』(一九五頁)では、西鶴作品の漢字を用法上から分類した中の「義訓一(熟字訓・当読みをふくむ)」に属する語に「日外」^{いっぞや}があり、『定本西鶴全集』では一一一番の句の「日外」に「イツゾヤ」と注が施される。^③

西鶴の浮世草子での語彙に関しては、杉本つとむ氏の前掲の書に詳しい論述があり、同書の序章には、以下のように西鶴の人となり^④を記す一節がある。

西鶴の〈新しがり〉を指摘しておきたい。もつともそれがただちに軽佻浮薄などというのではもちろんない。むしろ進歩的で積極的ないわば進取の気性に富む大阪商人の血が五体をめぐっている。その端的なあらわれが〈阿蘭陀流〉西鶴の出現と存在である。(一頁)

また、同書の「西鶴、ことばのスタイル」では、西鶴の文体を考える一つに〈諺〉があるとし、談林の俳諧について次のように

記す。

文学史的にも、貞門では実現しえない諺と文学表現、すなわち緊密なことばと思想の不可分な姿が談林俳諧にあるし、西鶴文学の中に躍動している。(一四九頁)

さらに、新しいことばを使つての表現と俳諧でのヌケの方法、つまり、ずばり言わないで、それと示唆するものを言う方法が、新しい表現力を作り出し、軽妙で機知滑稽に富んでいるのが談林の俳諧であるとも記されている。(一五一～一五二頁)

『西鶴五百韻』では、上述の「日外」と共に、「正体」に「性躰」^{シヤウタイ}、「丈夫衆」に「上夫衆」、「明星」に「明上」、「七夕」に「織姫」、「石帯」に「胃糸の帯」などの漢字を当てる用法が見える。

本稿では、以上の語の中から「日外・性躰・上夫衆」を取り上げ、中国の本義と異なる用法、或は漢字を置き換える用法に検討を加えることを目的とした。

本文中傍線は稿者が付記し、句の番号は各俳諧集での通し番号を示す。また、へ内は読み下し、及び割書きを示すものである。

一 「日外」について

一 一 辞書における「日外」

○『大漢和辞典』には

【日外】^{ニチガイ} (一) 日の照らす外。王化の及ばない地。(二) 元寇、

聯句) 願從^ニ聖明^一 兮登^ニ衡會^一 萬國馳^レ 誠混^ニ日外^一。(二) ^ニイッヤ^一 かつて。前日。

と記述が見えるが、(二)の意味での漢籍の用例はない。

○『日本国語大辞典』(以下第二版二〇〇一年を使用)には

いつぞや【何時一】^副(代名詞「いつ」に係助詞「ぞ」および「や」の付いてできた語)過去の時に関して「いつであつたか」の意を表わす。いつか。また、このあいだ。先日。

とあり、「日外」と表記される初出例には、当該集の三年後に成立した『好色一代男』から引用されている。

○『大言海』(昭和七年 富山房)には、

いつぞーや(副) 一日外一(何時ぞやノ義ニテ、やハ、不定ノ辞、過ギシ何時ノ頃ナリシカ、ノ意ヨリ転ズ) サキツコロ。過ギシ頃。

と見える。『大言海』の凡例によれば、「日外」に付された二重線は和漢通用字を示すものである。

また、古辞書類には、当該集以降成立の『合類節用集』『書言字考節用集』、一八二七年刊『大全早字引節用集』(節用集大系六四卷 大空社)に「日外」とあり、一八二三年刊の『俳字節用集』(節用集大系六〇巻 大空社)では「イツツヤ」に「過日」を当てる。

○『合類節用集』・日外(又曩昔又ノ去向同)(巻八上 言語部)

○『書言字考節用集』・日外(第二冊 時候門)

○『俳字節用集』：過日^{イツヤ}(上 四)

○『大全早字引節用集』：日外^{イツヤ}(左傍訓「ヒホカ」)(六)

向去^{イツヤ}(左傍訓「カウキヨ」)(十一) 増字

このように、当該集成立の翌年に刊行された『合類節用集』に初めて見え、伊京集・明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本本・易林本などの古本節用集には収録が見られない。それならば、『唐話辞書類集』には採録されるのか、その収録状況を確認した結果を次に示しておきたい。

○『唐話辞書類集』

日外 イツゾヤ 第四集『色香歌』

日外 イツゾヤ 第十二集『應氏六帖』

乃者^{イツンヤ}〈又乃者猶言彼時〉 第十二集『應氏六帖』

乃時^{イツンヤ}〈又乃時向時〉 第十二集『應氏六帖』

那指日^{ナチ} 左訓：イツゾヤ 第八集『両国譯通』(享保(1716)~

1735)頃の刊行)

一遭子 イツソヤ 第十八集『譯通類畧』(寛政元(1789)

年写)

前遭 イツゾヤ 第十八集『譯通類畧』(右に同じ)

右のように「イツゾヤ」には「日外^{イツンヤ}・乃者^{イツンヤ}・乃時^{イツンヤ}・那指日^{ナチ}・一

遭子・前遭」があり、『應氏六帖』の「日外」の出典注記にある

「五老集」は『名物六帖』に所収され、同書の著者は伊藤東涯である。長澤規矩也氏の『應氏六帖』の解説では

この本に著者名はないが、伊藤東涯の著述であるといはれる。目録にあるやうに、内容分類をして、語彙を収録、讀假名及び漢文體の字義語義を注し、ときにその一方を缺く。傳鈔本は、明律考のやうには多くないが、往々傳存して、互に誤脱がある。

と記され、『應氏六帖』と『名物六帖』の著者は同じである。『名物六帖』の成立については、中村幸彦氏の「名物六帖の成立と刊行」に詳細な論述があり、『應氏六帖』と『名物六帖』の深い関係を知る事が出来る。⁴⁾『五老集』については、『和刻本漢籍文集』の解題で長澤氏は次のように述べる。

上は東坡先生蘇公小簡(蘇軾)・仲益尚書孫公小簡(孫觀)、下は柳南先生盧公小簡(盧某)・秋崖先生方公小簡(方岳)・清曠先生趙公小簡(趙某)からなる。序跋が全くなく、編纂の次第未詳。古活字印本があるので、それに據ったか。

また、駒澤大学古典籍書誌詳細には長澤氏の解説を受けて、清曠先生趙公と「日外」の表記が見える柳南先生盧公の両者は共に伝記は詳らかではないとし「編者は邦人の可能性があるとされる」と記される。⁵⁾このように、柳南先生盧公とは誰であるか、著者が明らかでない点に問題がある。

『色香歌』については「日外」に並んで書名と同じ「色香歌」が掲出語としてあり、下注に「イロハ四十八字ヲ云」と記す。長澤氏は解説で「他に傳本を知らず、序によって、丹行藏の著と思は

れるが、傳未攷。」と述べる。成立年の記載がないこと、著者が不詳であること、「日外」の出典注記がないことなど、不明の点が多い。「日外」の出典を『名物六帖』とする可能性は考えられるが、推測の域を出るものではない。

以上のほかに「イツゾヤ」に類する語の収録があり、以下に示しておく事にする。

日外 センジツ 第十六集『學語編』(明和九(1772))年刊
本)

外日 センジツ 第十六集『中夏俗語叢』(天明三(1783))年刊本)

日前 先日ナリ 第二集『語録譯義』(延享五(1788))年頃作)

曩時^{ナキニ} 昔日也 第二集『語録譯義』(右に同じ)

右の「せんじつ」と訓が付される『學語編』では、「日外」の出典注記は見受けられない。長澤氏の解説には、『名物六帖』との関連性を示す次のような記事が見える。

凡例によると、典籍便覧・名物六帖・郷談正音・雑字通攷等の書から、漢語を採録し、天文・時令・地理等に分けて、相當の和語を旁注したもの。

また、近藤尚子氏の論考(1997)には「『名物六帖』を参照したとみられる状況がさまざまなかたちでうかがえる」と記される⁶⁾。

右の語以外に、時を表す語には、『唐話爲文箋』(第二集 唐話

纂要の焼直し)に「起先^{キイスイセン} サキホド・先前^{スエシズエン} 同上・前日^{ゾエンジ} センジツ」などが見え、『譯通類畧』(第十八集・十九集)にも「日者」を「マヘカト」と読む語などが収録されている。また「日者」では第二集『語録譯義』・第十五集『訓義抄録』(明治初(1868))年成立 未完成の稿本)に「コノゴロ」の和訓が記されていて、後者には「後漢」の出典注記がある。

以上のように『唐話辞書類集』では、「色香歌」「應氏六帖」「學語編」の三書に「日外」の収録が見え、『應氏六帖』のみに出典が明記される。

次に、『明治期漢語辞書大系』(全六五巻・別巻三 大空社)における「イツゾヤ」に対応する漢字を示しておく事にする。

○『明治期漢語辞書大系』()内の算用数字は巻数を示す

◆日外(右傍訓:ニチグハイ・ニチグワイ・ジツガイ/下注:イツゾヤ)

大増補漢語解大全191丁ウ(12) 読書自在38丁オ(29) 初学必携大全漢語字書24丁ウ(29) 訓訳考訂音画両引明治伊呂波節用大全187丁オ(35) 新撰歴史字典21頁(48) 明治漢語字典43頁(49) 漢語故諺熟語大字林1235頁(54) 新編漢語辞林149頁(55)

日外^{ニチゴヤ} いつしか 雅俗節用3丁ウ(28)
いつぞや 日外(副) 先きつ頃、過ぎし頃。作文新辞典335頁

(61)

右のように、「いつぞや」を意味する語として『明治期漢語辞書大系』所収の一四〇種の辞書中一〇種に収録が見える。『雅俗節用』（村田徽典編 明治九（1876）年刊）の解説では「これまで研究されてきていない辞書である。書名からは節用集を連想させるが、内容は漢語辞書である。」と述べ、『作文新辞典』（中村巷（静斎編）明治三九（1906）年刊）では「凡例の冒頭に：（略）；其の内容は、一種の読書辞書であることを主張している。漢語と和語とをそれぞれ五十音順に配列し、品詞と語義を記す。これはもう現行の国語辞典の形式である。漢語辞書がその使命を終え、国語辞典・漢和辞典に取って代わられる時期に達したと言えよう。」とある。

『明治期漢語辞書大系』の凡例では

本大系で漢語辞書として取り上げたのは、漢語（字音語）を中心としてその読みと語義とを示した辞書体の書物である。しかし、一部に和語や外国地名等を含むものや、語の配列順が意図的ではなく辞書とは言い難い体裁のもの（例「童蒙必読 漢語図解」など）も、内容を検討した上で、重要と考えられるものは収載した。と記される。同書には「日外」以外に「イツゾヤ」に当てる漢字表記があり、以下に提示しておきたい。

◆日前（右傍訓：ジツゼン・ニチゼン／下注：イツゾヤ）
いつぞや 日前

『西鶴五百韻』の用字

漢語註解49丁ウ（10）・開化新選字引63丁オ（18）・広益熟字典仮名引部190丁オ（19）など、三二種の辞書に「イツゾヤ」に対応する漢字として収録され、「イツゾヤ」以外に「サイツゴロ」で一出現する。

◆日者（右傍訓：ジツシヤ・ニツシヤ／下注：イツゾヤ）

大全漢語註解83丁オ（6）・漢語註解49丁ウ（10）など、約一〇種の辞書に「イツゾヤ」の訓注が見え、それ以外では「日者（下注：センジツ スギシヒ）」・日者（日猶「往日也」など約八回の収録がある。漢語故諺熟語大辞林1235頁（54）では「ニツシヤとヨム。日のヨシアシをウラナフ人。」とあり、訓訳考訂音画両引明治伊呂波節用大全187丁オ（35）では「イツゾヤ・ウラナイシノコト」と見える。

◆曩時（右傍訓：ノウジ・ナウジ・ソウジ／下注：イツゾヤ）

大増補漢語註解大全198丁オ（12）など、約二二種の辞書に「イツゾヤ」の熟字としての収録がある。それ以外では、下注「サイツゴロ・サキゴロ サキノヒ サキノトキ」で約一二回出現する。『大漢和辞典』に「曩時ナウ さきのとき。むかし。往時。曩日。『広益熟字典』（一九卷）に「曩日 サキノヒ 曩時 同上」とあり、両者の辞書から「曩時」と「曩日」は同じと捉えられるが、『明治期漢語辞書大系』では「曩日」に「イツゾヤ」と訓注を記す辞書は見えない。

一〇二 「日外」の用例

本項では「日外」の使用実態を示し、その用法を検討していきたい。『古典佛文学大系』（集英社）での検索はCD-ROMによる）

ア、『空華日用工夫略集』（康暦一（1380）年八月一四日）

十四日、二條殿使菅秀長送一緘來、其詩叙曰、謹依來韻、奉答建仁義堂和尚座右、致日外垂訪之謝云

（二條殿、菅秀長をして一緘を送り来らしむ。其の詩叙に曰く、謹んで來韻に依り、建仁義堂和尚の座右に奉答し、日外垂訪の謝を致して云ふ、）

* 日外 〓 先日。八日をさす。（『訓注 空華日用工夫略集』）

イ、『五山文学新集』

◆ 龍翔梅屋和尚、日外辱枉高駕於弊廬、刺蒙示賜佳什、仍借尊押、以伸賀忱

（龍翔梅屋和尚、日外辱なく枉げて弊廬に高駕し、あまつさえ佳什を示し賜い蒙る。仍て尊押を借し、以て賀忱を伸べる。）

（別卷二 天翔和尚録 坤 次韵奉謝相公捨田 室町前期）

◆ 遂就北山等持精舎、施設追脩靈筵、日外白業、件々品目、東之以付紀綱

（遂に北山等持精舎に就き、追脩靈筵を施設する。日外の白業、件々の品目、之を束し以て紀綱に付く）

（第三卷 東沼周巖作品拾遺 流水集 室町中期）

ウ、『高野山文書』

日外者預御状ニ、其上御音信忝存候、其元彌別條無之候哉、承度存候事、（七卷 三三五 奥彌兵衛書状 室町後期）

エ、『書札調法記』（〇印の下は傍線を付す語に対する代替語）

◆ 貴人（上） に対して

・ 去比御出之處他出 仕 不_レ得_二貴意_一 残念奉_レ存候：

〇 去比 以前 此前 先度 先日 兼日 去月 去日

邁日 日外 先頃 先鳥 卷一（一七丁ウ・一八丁オ）

◆ 同輩（中） に対して

・ 内々御約束仕候 通明日於_二下屋敷_一 籠相の御食進上申度存候：

候： 〇 内々 兼々 兼日 兼鳥 前角 先頃 此間 日外 以前

最前 先日 先度 去日 去月 日比 常々 年月 年來

卷一（一九丁オ・ウ）

◆ 下の人 に対して

・ 示_レの通日外は初而参会申如_二年来名染_一 存候：

〇 日外 先頃 先度 卷一（三五丁オ・ウ）

右の書簡の手本では、貴人・同輩・下輩に用いられ、上・中・

下により差別される語ではない。『書札調法記』は元禄八（1695）

年初版によるものであり、『西鶴五百韻』の一六年後、『合類節用

集』の一五年後の刊行となる。『書札調法記』では「日外」に類す

る語として、右の語以外にも

日ひ之の前まへ 過くわ日じつ 此この頃ころ 此この節せつ 此この日ひ比ひ 頃この日ひ 近きん頃ころ 近きん 曾そう
近きん日じつ 近きん々々 近きん鳥と 此この程ほど 此この中ちゆう 去き比ひ 往わう日じつ
などがあり「前日」の言い替え語として「外日」が見える。

いまひとつ、手紙・文章の手引書である『新撰用文章明鑑』に
は次のように手紙に用いることばの意味や用法を解説する記事が
ある。

オ、『新撰用文章明鑑』

日外 大方用るといへども是も女文章也。尊貴之方公界之は出

されずにやく也先日 或去比など有べし先度右に同じ

日外とは程近をいふべし一月二月又は百日斗前をもいふ

べし。年数へた、りをいふは僻事也(卷中五丁ウ六丁オ)

右の書は前掲の『書札調法記』と同年に刊行されているが、こ
では貴人には適さないといい、『書札調法記』とは違いがある。ま
た類似語として

近曾(左傍訓：きんそ)―去比 四五日以前をいふ也…

頃日―此頃 此間 此中 此程 週間…

などの収録が見える。以上のエ・オの「日外」に類する語では、
いずれにも「いつぞや」と振り仮名が施されることはない。併せ
て音読みされる語がある中で、「日外」に「ニチガイ・ジツガイ」
のヨミを記す例はなく、すべて「いつぞや」と読む。

カ、「新編宗因書簡集」

先以、貴老弥御無事ニ御座候哉、承度存候。然は、日外ハ貴札、

殊更西行谷・愚亭興行之連歌之懐紙、清書被成被下、誠御事繁
候ハん処ニ、忝存候。

(延宝二(1674)年四月二日 内宮長官荒木田氏富から宗因
宛)

〔カ〕の書状は、前年の一二月一九日に宗因が発した書簡に対す
る返書であり、四ヶ月前の日を「日外」と表現する。一方、宗因
が荒木田氏富に宛てた寛文一三(1673)年七月四日付の書簡に対
する八月四日の返書では、「先日ハ御発句早々被下、過分至極候。」
と一ヶ月前の日を「先日」と言い、今日に近い日では「一昨日者
八瀬宜方迄之御状、忝存候。」(寛文一三(1673)年 八月二四日
荒木田氏富から宗因への書簡)と「一昨日」を用いる。
キ、『滑稽太平記』

◆十日斗有て、両卷を持参し、玄札に向て云、「日外両度御無心
忝存候。然れば、以前御添削被下候卷、反古に紛れて候を見出、
引合候に、御添削相違し侍る。…(以下略)」

(卷之四 高島玄札出来口の事 延宝八(1680)年頃成立)
◆日外、此歌ども、御状被下候へ共、疾した、め置ながら、此
方より便無之、御報延引、背本意候。

(卷之七 蝶々子・季吟子贈答歌の事 延宝八(1680)年頃成立)
ク、『芭蕉集 全』

◆予、日外かた田舎の老夫の語りしを聞に、「わさびうへ置かし
こに、必蟹来てこれを喰ふ」と。

〔句合・評語編 常盤屋之句合第五番詞書 延宝八(1680)年〕

◆先以、日外於御山御懇情之事共、難忘奉存候。

(書簡編九九曲水宛 元禄五(1692)年二月十八日付)

◆將又日外御申被成候絵、御心隙に被遊可被下候。

(書簡編一二木節書簡 元禄七(1694)年七月二十二日付)

ケ、『蕉門名家句集 二』

日外の鰻でも酔はず老の春 「作者小伝」自笑

コ、『蕪村集 全』

日外は御状被下候處、御答も不申上無頼之至、御免可被下候。

(書簡編一七〇 安永七(1778)年九月二十一日付)

サ、『五老集』

日外郊行見有盤踞草中疑爲怪物徐而視之則

暗香一―根耳…

〔日外郊行し、草中に盤踞するもの有るを見る。疑うらくは怪物

と為し徐くにして之を視るは暗香一―根のみ〕

(『五老集下』十八 柳南先生盧公小簡 送枯梅)

シ、『本居宣長翁書簡集』

然ば日外噂致候通、恵勝様廿七回忌、来る十月取越相勤申候

(二七九 寛政五(1793)年九月二十六日小西春村宛)

右に提示した用例の中で、「日外」のヨミは音読みの可能性も考えられるが、いづれにおいても「いつぞや」或は「先日」の意を表す。蕪村は〔コ〕の安永七(1778)年の書簡では「日外」を用

い、安永末・天明頃と推定される「書簡編(三〇〇 金篋宛 一月二七日付)」では「日外」ではなく「まことに過日は御馳走に罷成辱奉存候。」と「過日」を用いる。その後の一茶の書簡でも

・秋冷候へども、弥御安清被成候や、奉賀候。されば、過日は別してありがたく、御蔭にて天窓の寒さを助かり申候。

(二八 文虎宛 文化一〇(1823)年九月)

・陽炎ばつば立、片道かたまり、漸心暖ニうつり申候。弥安清被成〔候〕哉、奉賀、されば過日は参り、長々御坐敷ふさげ、ありがたく奉存候。

(四八 希杖宛 文政元(1828)年二月)

・過日、御見廻の品ありがたく、御礼申上度、外は春迄と。

(一〇六補遺 呂芳宛 文政三(1820)年二月)

と見え、蕪村を境にして「日外」から「過日」に推移する様子が窺える。続いて、『日本国語大辞典』の「日外」で表記する初出例が『好色一代男』から引用されていることから、西鶴に関する作品の中で「日外」の用法を提示してみたい。

ス、同じ心の水のみなみ清水八坂にさし懸り此あたりの事ではないか。日外物がたりせし歌よくうたふて酒飲て然も憎からぬ

女は菊屋か参河屋蔦屋かと捜して

『好色一代男』巻一の七(19ウ)

セ、知ぬ事か小川の糊屋の娘目が今天神兒をしをつてとにくさげにそしる。さては日外ふられたか。

『諸艶大鑑』卷一の三(11才)

ソ、濁水大かたかすりて真砂のあがるにまじり日外見えぬとて人うたがひし薄刃も出昆布に針さしたるもあらはれしが是は何事にかいたしけるぞや

『好色五人女』卷一の(3才)

タ、空寝入をして見るに大吉が手をしめて日外の所は今に痛ますかといふ。

『男色大鑑』卷二の二(8ウ)

チ、爰は私に給はれとはしり寄奥右衛門打せらる、汝なれ共日外の遺恨あれば命を我ら申請て打事なり。

『武道伝来記』卷三の二(12才)

ツ、今一たびの命を諸神に立願せしに不思議に快氣して手もはたらき足も立程になりぬ。時に日外の遺恨やめがたく段々筆に残し具足甲を着ながら鎧取まはして

『武家義理物語』卷三の三(9ウ)

テ、そののちまた此宿へ通りがけに立よりけるに人うつけたりとて鬪まじき事とて亭主のかたりけるは日外女房よびし男は中世古といふ所に松坂屋清蔵とて身過にかしこき世間愚なる男なりしが

『懷硯』卷三の一(1才)

ト、さても臆病なる大臣かな太夫本の湯の子くはれた物てあらう日外長町の若き者共今宮の神前にて百物語したれば少人か出た

といふ

『難波の兒は伊勢の白粉』卷二(16ウ)

ナ、日外茨木屋の茶づけめし勝手はいそくにやすくし茶のぬるきやうにおもはれて今一はいといふ時。其盆に小判十兩入て内證

へおくられしも此道の帥めきておかし。

『西鶴俗つれづれ』卷二の二(9才)

ニ、日外の生加賀のひとへ羽織すこし長く候。小男のおかしく候。式寸四五分切申度候

『万の文反古』卷一の四(17ウ)

右のほかに、『好色一代男』卷三(8ウ) 卷八(5才)、『諸艶大鑑』卷六(16才) 卷七(13才・19才)、『好色五人女』卷四(15ウ)

卷五(7才)、『男色大鑑』卷一(24ウ)、『武道伝来記』卷四(9ウ) 卷八(6才)、『武家義理物語』卷三(8ウ) にも用例があり

「いつぞや」と振り仮名が付される。

それならば、何故「イツゾヤ」に「日外」を当てたのかを、次に考えてみたい。『大漢和辞典』によると、「外」には「まへ。以前。」の意があり、用例に「荀子、非相」五帝之外、無傳人。

〔注〕外、謂「已前」とある。『倭玉篇』(慶長十五(1617)年版)

には「外(左訓ケ) ホカ ハヅル、ウトシ トヲザカル」とある。また『五山文学新集』四卷『正宗龍統集』の「附録 袖中秘密藏」には、「外」に「ワスル事」と訓が付される。よって、中国で本来「日の照らす外。王化の及ばない地。」を表わしていた「日外」が、日本では「いつだったか確かな日は忘れたが、今日以前の日」という意味を持つようになる。「日外」が表す過去の日とは、昨日や一昨日ではなく、それより少し前の日を意味し、いず

れも漠然とした表現法を採用し、その日がいづであったかよりは、下接される事柄に重点が置かれる。この漢字表記は、一連の研究

対象資料とする一〇俳諧集では、『西鶴五百韻』以外には出現しない。五山文学に用例が見えることから、すでに近世以前に用いられていて近世へ引き継がれた語であることは言うまでもない。

二 「性躰」について

前節の「日外」のように、漢字とヨミの関係ではなく、『西鶴五百韻』では、「正体」に「性躰」のように、現在とは異なる漢字を用いる例がある。そこで、本節では「性躰」は漢語か、それとも当て字であるのかを検証していきたい。前節の熟字訓は漢字一字にヨミが対応することなく、表記された漢字の義によりヨミが与えられるが、当て字は義に直接的には関係なく、漢字の音訓を利用して構成された表記を言う。

『西鶴五百韻』の集中

月の影落て行とものかすまい (一六三 西鶴)
瘡の性躰風の夕露 (一六四 西花)

と見え、前句の「落て」は瘡が治ることを意味し、「落て」から瘡(マラリア)の正体が「風に吹かれた夕露」のように消えたと付け加える。『大漢和辞典』には「性躰^{セイタイ} 心の本體」と収録があり、北史『杜弼傳』から「若論^ニ性體、非^レ慳非^レ寛」の用例が示されている。「正體」では「正體^{セイタイ} 正しい姿。本體。正しい血すぢのもの。太子。ただしい書体。」とあり、「シヤウタイ」のヨミでは「ころ。正氣。本当の姿」などと記される。『日本国語大辞典』でも

「そのものの実際の姿。本体。実体。正氣」などとある。「性」は『大漢和辞典』に「セイ・シヤウ」のヨミがあり、「姿態」の意もあることから、姿形がなくなることにより「性躰」を用いることは間違ひとは言えないだろう。因みに節用集には

正体・饅頭屋本
正躰・御正躰・易林本節用集
無正體・合類節用集
正體・書言字考節用集

とあり、「性躰」の収録は見えない。漢籍に関する書では次のような用例が見える。

ヌ、家ノ子ワカタウヒキツレテ皆打死ヲシタソ各人ナリ前ニモカウシタ者カアツタシトヲホユルソ當世様ニハ性體ナシト云ワウソ
『史記抄』二 114

ネ、肴一肴は肉ソ、核ハ果子ソ、狼一性体ナキ体ソ、フシタル、テイテ
『古文真宝桂林抄』乾 23ウ

「ヌ」は正氣を失った状態、「ネ」では狼が草を踏み荒らして、元の形を留めない状態を「性躰なし」と表現する。

ノ、陳篇一フルキ本ヲ見テ、ヌスミトルソ、然一コレホトニ性体ナケレトモ不被誅、
『古文真宝桂林抄』乾 41ウ

右の「ノ」は誤った行いをする正しくない心の状態を表現し、同書46ウにも「性体ナキホトニ」と見える。

ハ、梁國一富タ國テヨイ美女ハイクラモアラウスタトイ王コソ性躰ナクトモ姑モハツカシウ思ワウスソアリツヘウモナイ事テサフトテ助ケ義ヲ云ソ
『漢書抄』一 40ウ

同書ではこの他にも「身モチヲ性躰ナウフルマウトセラル、ヲナント」(32ウ)、「性躰ナウシウシナワタレハ」(63ウ)とある。近世では

ヒ、いたかア性体しやうたいをあらはせく 『東海道中膝栗毛』四編上と「痛いならば本当の姿をあらわせ」と「本当の姿」の意で用いる例が見える。次に「正躰(体・體)」の用例を挙げてみる事にする。

フ、只、「わがもとに、ふるくより写し持ちて候」とばかり申されけり。「さてはその事正體なし。この人はをし事する人にこそ」と沙汰ありて、もちひられず成にけり。

『古今著聞集』巻一一 402

へ、その、ちこの僧、件はれて、心身もなやみて、いける正體もなかりけり。 『古今著聞集』巻二〇 720

〔フ〕は「根拠がない・信頼できない」ことを表し、〔へ〕は「精気を失った状態」を表わす。同書卷一五(484)では「更に分散せずして、正體みなつゞきたり」と「本体」を表わす意に「正体」を用いる。

ホ、縦飲―……酒ヲ飲ミ無正躰事ハ我レトハヤ又判断シテモツ回
は大飲二人亦棄ツト 『杜詩統翠抄』四

マ、酒徳―……酒斗テ正体ナキホトニ妻カ教訓シタレハサラハ断
酒ヲセン 『古文真宝彦龍抄』93ウ

など、抄物では正気を失った状態に、前掲の〔ヌ〕から〔ハ〕の

「性躰」と同時に「正体ナキ」も見える。

ミ、正躰もならもろはくのやよひ哉 親重 六一七

『犬子集』巻第二

ム、さくる程なるや正体なしの枝 利清 一一〇〇

『犬子集』巻第四

右の〔ミ〕は、お酒を飲みすぎて、〔ム〕は多くの実をならせ枝が裂けてしまうことによる前後不覚の状態を意味する。

メ、月の劔二尺斗を落し指 正躰すさまし尻声かない

『西鶴大矢数』第三八・横何(31オ)

モ、いざ正躰見せ給へと。蒲團ふとんをまくれば

『武道伝来記』巻五第四(19オ)

〔メ〕〔モ〕の「正躰」は「本来の姿」の意と解する。これらのはかに「正躰」の用字は、俳諧では『鷹筑波』(三八八四番)、『犬子集』(一九八六番)、『崑山集』(二〇〇二・六四〇三番)、『玉海集』(二八四二番)、『ゆめみ草』(二五四〇番)、『投盃』(四一六番)、『金龍山』(一五七〇番)などに出現する。また、俳諧以外の西鶴に関する作品では、『武道伝来記』巻三(13オ)・巻一(24ウ)、『新可笑記』巻二(24ウ)・巻四(11ウ)などにも見えるが、『古典俳文学大系』あるいは西鶴の浮世草子では「性躰」の用例を探し得なかつた。

以上の考察の結果、現在では本来の姿や心の状態を表わすのに「性体」とは表記しないが、「性躰なし」と「正体なし」は両者と

も、本来の姿・心を失った状態に用いられことが認められた。よって、「性躰」は当て字ではない。

三 「上夫」について

本節では、前節と同様に『西鶴五百韻』に見える「上夫」について、当て字であるのかを検証していきたい。

『西鶴五百韻』には

是は又旅行の暮の自身番 (八三 西花)
都へのほりたまふ上夫衆 (八四 西友)

とあり、『定本西鶴全集』の注釈によると、八四番の「都へのほりたまふ」は謡曲「松風」の「行平都にのほりたまひ」を典拠としていると記され、「上夫衆」には「用例を見かけない。身分の高い人の意であらう」と注が施される。国語辞書や漢和辞典には「上夫」の収録は見当らない。「丈夫」を見ると名詞と形容動詞の二通りがあり、当該句の意と名詞の意が一致する。

○『日本国語大辞典』

じょうぶ ウヂヤ・【丈夫】〔名〕(「じょうぶ」)とも、昔、中国の周の制で、八寸を一尺とし、一〇尺を一丈とし、一丈を男子の身長としたところからいう(1)一人前の男子。(2)心身ともにすぐれた男子。勇氣ある立派な男子。大丈夫。ますらお。(3)夫。良人。

じょうぶ ウヂヤ・【丈夫】〔形動〕(1)身に少しの疾患、損傷も

なく、元気であるさま。すこやかなさま。壮健。達者。(2)しっかりしていてこわれにくいさま。堅固。(3)たしかなさま。确实なさま。

○『大漢和辞典』

【丈夫】 ウヂヤ (一)をとこ。ますらを。(二)才能の衆に過ぎた人。(三)をつと。夫。(四) ウヂヤ ①健康。強いこと。②堅固。かたいこと。

名詞「丈夫」には以上のような意味があり、「松風」に登場する在原行平を「心身ともにすぐれた男子」と見て、八四番では、都へ「上る」との関連から、「上る」と「普通の人よりも上の尊貴な人」という意を懸けて、或は形容動詞の「丈夫」と区別するために「丈」に「上」が選択されたと捉えられる。

○『文明本節用集』(1680頃)・丈夫(「丈」の左訓「ハガル」、「夫」の左訓「ソレ・ラツト」)(173態藝門)

○『谷類節用集』(1680)・丈夫(卷三・95 人物部) 丈夫(強云)(卷八上・45 言語部)

○『書言字考節用集』(1717)・四一五 丈夫(「勻會周制八寸、為レ尺十尺、為レ丈八尺、故曰丈夫、論衡人形以二丈、為レ正故名男子、為二丈夫、尊三翁媪、為二丈人、出レ未」)

「丈夫」は中国本来の漢語であり、古くには『靈楽遺文』(文学編・人々傳・家伝上)に「或語云、雄壯丈夫二人、恒從公行也」と見え、『太平記』(卷一八越前府軍)には「此人丈夫ノ心ネヲハ

シテ、加様ニ思ヒ給ケルコソ憑シケレ」と、雄々しく才能の衆に過ぎた立派な男子を表現する一文が見える。形容動詞「丈夫」は、名詞形から派生した日本の用法であり、現在での通用語となっている。名詞「丈夫」の近世以降の用例を次に提示しておきたい。ユ、五十 内則曰五十にして丈夫となり官政に服すとぞ。

『俳諧類船集』

ヨ、富家喰ニ肌一肉一丈夫喫ニ葉一根一予ハ乏し。

『芭蕉集』発句編(1681年)(一三三番前詞書)

ラ、ひとりの丈夫の語りつるは爰にもめづらしき人こそ出来り侍る

『近代艶隠者』三・五(1686年)

リ、されど此詞の過当にして、他門の宗匠にもはゞかるべければ、いつかは我門に丈夫の人ありて、此詞を百世に伝へん、是さら

に家訓の密語ならんとぞ。『十論為弁抄』(俳諧古人)(1725年)

ル、大根のからみのすみやかなるに、山葵のからみのへつらひたる匂さへ例の似而非ならん。此後に丈夫の人ありて心のねば

りを洗ひつくし、剛からず柔ならず、俳諧は今日の平話なる事をし

らば、はじめて落柿舎の講中となりて箸箱の名録に入べしとぞ。『十論為弁抄』(洛陽風土)(1725年)

レ、十二や三の子にて、年に似合ぬ丈夫の魂、此上は留ても留ら

を書てと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるもの歟。

『鶉衣』(指峯堂記)(1786年)

ワ、病人は眠るが如くに身まかりぬ。朝露夕電脆きは人の命なり。恭輔のかなしみはいかばかりなりけん。目になかぬ丈夫の死別は。思ひやるさへにいと痛まし。

『内地雑居未来之夢』第三回(坪内逍遙)(1866年)

キ、「先生もそんな事を考へて御出でですか」「いくら丈夫の私でも、満更考へない事ありません」

『ごころ』上・先生と私・二十四(夏目漱石)(1911年)

エ、御父さんなんぞも、死ぬく云ひながら、是から先まだ何年生きなさるか分るまいよ。夫よりか黙つてる丈夫の方が劔呑

さ 『ごころ』中・両親と私・二(夏目漱石)(1911年)

「キ・エ」では、それまでの「丈夫」とは違い、心がしつかりしている様を表し、形容動詞に通じる用法が見える。

以上のように「丈夫」の用例は見えるが「上夫」は探す事ができなかつた。『西鶴五百韻』の「上夫」は、語の本義とつながりを持ちながら、視覚的な新しさや面白さを出すために採用された戯書の一つであると言える。

おわりに

以上、『西鶴五百韻』の集中、現在では通用していない熟字について考察してきた。

一節の漢語「日外」は、元来「日の照らす外」という意味であったものが、「外」に「以前」「遠ざかる」意があることから、日本では「いつぞや」の意味を持つようになり、古代の中国語の用法が変化して、日本独自の意味を持つようになったと解する事が出来る。

二節で取り上げた「性躰」^{シヤウタイ}は、現在では「本体・正気」などに「正体」が対応し、「性躰」の漢字を対応させることはない。「大漢和辞典」には「性體^{セイタイ} 心の本態」と漢語としての収録があり、用例では「性體なし」と「正体なし」は、同じような場面で用いられているのが認められた。故に『西鶴五百韻』一六四番の「性躰」は当て字ではなく、正当な漢語の用法と見做す事が出来る。三節の「上夫」は、遊戯的な文字遣いを行なっているのであって、誤字ではない。「丈」を「上」に置き換える事により、「丈夫」以外の意味を含ませた当て字の用法である。

以上のように、『西鶴五百韻』では漢語や当て字を駆使して、新鮮さや滑稽味を表出しようとした実態を窺い知る事ができる。

注

- (1) 一〇俳諧集「正章千句 紅梅千句 宗因七百韻 當流籠拔 西鶴五百韻 江戸蛇之鮓 江戸宮筥 軒端の独活 七百五十韻(以上)『近世文学資料類従』所収) 江戸八百韻(天理図書館俳書集成所収)
- (2) 拙稿『江戸八百韻』に見える「哆」の訓みについて『関西大学『国文学』98号 2014・3) / 『近世初期俳諧の用字考証——當流籠拔』に

おける「悶る」^{イダ}について(『関西大学『国文学』96号 2012・3) / 『近世初期俳諧における「やさし」の用法——江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶」について(『関西大学『国文学』95号 2011・2)

(3) 『西鶴語彙管見』杉本つとむ著 1982年 ひたく書房

(4) 中村幸彦『中村幸彦著述集 一一卷』「三 名物六帖の成立と刊行」1982年 中央公論社

(5) 駒澤大学古典籍書誌詳細

(www.welb.komazawa-u.ac.jp/retrieve/.../02frame.html?m)

(6) 近藤尚子『名物六帖』と『学語編』文化女子大学紀要 人文・社会科学研究 第5集 1997年

参考文献

- 『一茶集』15巻『鶉衣』14巻『金龍山』11巻『滑稽太平記』2巻『十論為弁抄』6巻『蕉門名家句集 二』9巻『芭蕉集 全』5巻『蕪村集 全』12巻(『古典俳文学大系 1970～1972年 集英社』) / 『大子集』(『初期俳諧集』新日本古典文学大系 1991年 岩波書店) / 『空華日用工夫略集』義堂周信著 康暦一(1380)年(辻善之助編兼著 1938年 大洋社) / 『訓注 空華日用工夫略集』藤木英雄著 1982年 思文閣 / 『好色一代男』(大坂版) / 『好色五人女』『男色大鑑』『諸艶大鑑』『新可笑記』『難波の兒は伊勢の白粉』『武道伝来記』『武家義理物語』『万の文反古』『近代艶隠者』(近世文学資料類従 西鶴編1・3・7・8・10・11・18・20・23 1974～1976・1981年 勉誠社) / 『高野山文書』1973年 歴史図書社 / 『うっろ』夏目漱石 大正三(1914)年(『漱石全集 六卷』大正一四(1925)年 漱石全集刊行会) / 『古今著聞集』日本古典文学大系 1983年第一六刷 岩波書店 / 『五山文学新集』一～六巻 1967～1972年・別巻一～二 1977年1981年 東京大学出版会 / 『漢書抄』『古文真宝桂林抄』『古文真宝彦龍抄』『杜詩統翠抄』(『続抄物資料集』第三～五巻 1980～1981年 清文堂) / 『五老集』慶安三(1650)年(『和刻本漢籍文集第二十輯』長澤規矩也編 1979年 汲古書院) / 『崑山集』『西鶴大矢数』近世文学資料類従 古俳諧編23・31・26 1974

～1976年 勉誠社／『懐硯』『西鶴俗つれづれ』（『新編西鶴全集 第三・四
 卷・本文篇』新編西鶴全集編集委員会 2003～2004年 勉誠社）／『史記抄』
 （『抄物資料集成』第一巻 1977年 清文堂）／『書札調法記』『新撰用文章明
 鑑』近世文学資料類従 参考文献編5・6 1976年 勉誠社／『新編宗因
 書簡集』（『談林叢談』野間光辰著 1987年 岩波書店）／『太平記』日本古
 典文学大系 1982年第二一刷 岩波書店／『定本西鶴全集』頼原退蔵・暉峻
 康隆・野間光辰編 1972年 中央公論社／『東海道中膝栗毛』十返舎一九
 文化六（1809）年刊（『日本古典文学大系』1958年 岩波書店）／『唐話辞書
 類集』第一集から第二〇集 古典研究会 1969～1970年 汲古書院／『内
 地雜居未来之夢』坪内逍遙大正一五（1926）年 明治文化研究会／『中村幸
 彦著述集』第七・十一巻 中村幸彦著 1982・1984年 中央公論社／『寧楽
 遺文』下巻 竹内理三編 1972年 東京堂／『根無草』平賀源内 1763-69
 年（『風来山人集』日本古典文学大系1961年 岩波書店）／『俳諧類船集』高
 瀬梅盛著（京都大学国語学国文学研究室 1955年／村上雅孝『近世漢字文
 化と日本語』2005年 おうふう／『本居宣長翁書簡集』1934年 啓文社
 ／『名物六帖』伊藤東涯著 1714年自序（1979年 朋友書店）／『和刻本漢籍
 文集』第二十輯 長澤規矩也編 1979年 汲古書院
 ＊『正體』の用例に挙げた『鷹筑波』『崑山集』『玉海集』『ゆめみ草』『投
 盃』は『古典俳文学大系CD-ROM』（集英社）による。

The Orthography of *Saikaku gohyaku in*
The assimilation of Chinese words into Japanese usage
and the role of *ateji*

TANAKA Mieko

Until the Muromachi era, the relationship between *kanji* (Chinese characters) and *furigana* (small-print marginal annotations to *kanji* using one of the Japanese *kana* syllabaries) was chiefly that the latter were used as guides to the pronunciation or meaning of unusual or difficult characters. But in the early modern period, *furigana* came to be used more creatively as a means for expressing double meanings or overlapping significations, and in *haikai* from the beginning of the early modern period, *furigana* take on a variety of functions. But there has been little progress in research into *haikai* from this period. This paper aims at furthering such investigation by examining *Saikaku gohyaku in*.

The first section demonstrates how the *kanji* compound 日外, which in classical Chinese meant “a place the power of the sovereign does not reach” came to be read and used in Japanese as *itsuzoya*.

The second section looks at how the now obsolete compound 性躰 (*shotai*) was used in the same contexts that the present 正体 (*shotai*) would be employed, and seen as a legitimate usage of Chinese vocabulary.

The third section considers the use of 上夫 as *ateji* or phonetic substitute characters for 丈夫 in order to express a double entendre.

The paper thus reports on the relationship between *kanji* and their phonetic readings in the work *Saikaku gohyaku in*.